



TITLE:

フォーセット、英蘭の自然的區分

AUTHOR(S):

小牧, 實繁

CITATION:

小牧, 實繁. フォーセット、英蘭の自然的區分. 地球 1934, 22(3): 215-224

ISSUE DATE:

1934-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184333>

RIGHT:

フォーセット、英蘭の自然的區分

小 牧 實 繁

は し が き

本稿はフォーセットの「英蘭の自然的區分」なる論文の抄譯的紹介である。今より既に十數年も以前の研究に屬するものではあり、且論文そのものも大して優秀なものであるとは思へないが、實用の見地から地理學者が一の地域區分を試みた業績の例としてこれを取り上げることとしたのである。

地域區分に就いては一九〇五年、故ハーバートソン教授の論文が發表せられて以來、多くの地理學者の説が發表せられその若干に就いては最近兩三年に五つて筆者が地理學關係の一二の雜誌上に紹介した處である。それ等論文のうちにあつて筆者が本稿に紹介せんとするそれは、直接これを地方行政區の區分に對する參考に供せんとするものである點に於いて異色あるものである。

學問は學問のための學問であるべきが理想であり、その理想によつて學問の質は向上するのであらうが、一方吾々は實用といふことを蔑視すべきではない。吾々の學問と雖も何

等かの點に於いて利用厚生に役立ち世道人心に益する所があればそれに越したことはないのである。學問の世俗への迎合學問の下等なる利用には賛成し得ないが、學問の實用上に於ける價值を無視し、實用を論ずることが學問の冒瀆でもあるかに考へる偏狹性にもくみすることが出来ない。

研究のデパートが古く、またその價值が必ずしも高いものではないが、實用に資せんとする意圖を多分に含むこの論文をかゝる種類の地域區分論の一例として取上げ紹介する所以はこゝにある。

以下がフォーセットの議論である。

愛蘭は絶えず自治を要求し、同時に蘇格蘭やウェールズを見るも其處には強い國民的感情が存し育くまれ愛蘭に於けると同様な自治の要求が次第に増大しつゝある、といった情勢は歐洲大戰前に於ける英本國政治上の大問題であつ

た。大戦は英國民を完全に疲勞せしめ終つたが、若しこのことが無かつたとしたならば、恐らく上述の要求は戦後更に強烈なるものとなつてゐたと思はれる。英國議會は一方に於いては英國を統治し他方に於いては英本國諸島の内部的地方的政治を處理しなければならぬといふ二重の負擔により既に荷は過重であると言はなければならなかつた。即ちこれ等何れの方面も、それのみで全時間と全精力とを消費せしむるに充分であつた。従つて英國議會の負擔を輕減するといふ意味で、議會の有する權能の一部を英蘭、愛蘭、蘇格蘭、ウェールズなる四地方の各自の國民議會に委ねてはとの提案がなされるに至つたのはまた當然と言はなければならぬ。この提案こそは「總てを自治に」(Home Rule All Round) なる數語に盡さる。換言すれば英王國(The United Kingdom)の聯邦國への變改である。

然るにこの提案に對しては一の重要な障礙

が考へられるのである。それはこれ等四地方の一なる英蘭が英本國全人口の四分三を有し同じく富の四分三以上を有することであつて、従つて必然的にそれが聯邦を左右するに至らぬといふことである。更にまた英本國の議會と英蘭の議會とが共に倫敦なる同一都市に存することともなれば英蘭の勢力はいやが上にも増大することとなるであらう。而して一八七一年以後プロシア議會と獨逸帝國議會との間に於いて見たる如き兩議會の勢力争ひといふが如きことも惹起せられるであらうといふことが問題となる。

かかる難問題を處理する方法は何であらうか、それは英蘭を更に若干の地方區に區分しそれ等各々に蘇格蘭・ウェールズに匹敵する地方自治政府を設置することであらう。英蘭にあつてはその各地に於いて政治問題も大いに相違し、四三〇〇萬の住民に對する地方行政も夫々異つてゐるのであるから、この點からしてもかかる區分は望ましきものである。英本國議會の

負擔が餘りにも過重であるがため、その議會權能の一部を上述四地方に分割委任するといふ問題が発生するのであるが、同時に四地方の一たる英蘭を更に區分するといふ問題が自然發生するのであつて、その區分たるや主として地理學的考察の上に基礎づけられてゐなくてはならないであらう。かくて英蘭の自然的區分とは如何なるものであるかとの問題に入るのである。

一方、今日現存する英蘭地方行政區劃の境界なるものは極度に錯雜してゐて既に時勢に適合しない如きものが多い。現存する州(County)の歴史的起原は中世にまで溯る。州の境界が定つたのは英蘭が殆んど自給自足經濟下にあつた當時のことで、當時としてはかかる境界も大體満足なるものであるが、夫は既に過去のものである。産業革命時代、人口は極度に増加し國內に於ける人口分布は勿論のこと交通通信にあつてもまた地方行政にあつても一大變革が齎されたのである。だから現在地方行政區劃の境界は大

部分が夙に時勢後れのものであると言ふも過言ではなく、若干境界の變更が行はれたものがあるとしてもそれは極めて微々たるものであつて、全體に互つての考慮といふものは何等めぐらされなかつたのである。

さて茲に大地方行政區の境界を設定するに就いて當然考慮せらるべき二三の點に就いて述べて度い。國家と國家間の境界に就いて考へられるが如き軍略上の見地は此處では何等問題とはならない。問題の場合に於いては要するに地方行政をより容易ならしめることが目的なのである。以下考慮さるべき諸點を、略その重要性に従つて配列することとしよう。

一、境界は各地方區(Province)住民の日常生活を出來得る限り阻害せざるやう設定せられなければならない。普通住宅地と仕事場とは同一區内に入る如くしなければならぬ。住宅地と仕事場とが別個の區内に入れられるが如きことともなれば各住民の生活は分割せられ各人の地

方行政に對する關心はそれ丈け減ずることとなるからである。従つて境界は要するに人口稀薄な場所に引かれなければならないこととなる。

即ち纏まりある人口稠密箇所は同一區内に入れられなくてはならない。更に郊外地を市街部より分離するが如きは出來得る限り避くべきである。尤も英蘭の如き面積も然かく大ではない土地に於いて住民の利害關係に全然無理の存しない如き地域區分をなすことは幾分難事ではある。併し兎に角境界線は出來得る限り人口稀薄の地に引かるべき性質のものであつて従つて茲に述べる境界線は大體人口分布圖と比較して引かるべきものである。

二、各地方區のそれぞれに一定の首都を置くことは地方的愛郷心をそる上にも是非必要なことである。最近數十年間に於いて、Geddes教授の用語に従へば所謂 "conurbations" なるものが各地に生長し既にそれ等の各々は各地方的首都たるの資格を具備し來つたといふ事實か

らも、この問題の解決は然かく困難ではない。かかる資格を有する都市の好例は Birmingham である。バーミンガムはこの地方商業上社會施設上教育上その他あらゆる點での焦點であり、且、明確なる地方的個性を有し、直接他の中心に服屬してゐるものとは考へられないのである。

三、一地方區の最小のものと雖も一自治體たるの資格を有するに充分なる人口は保有することが必要である。後の討論に際しての基礎としてまづ百萬を最小限度とすると提議して置かう。この數字はカナダ植民地、オーストラリア聯邦の一州の必要と考へられる人口數よりも大である。尤もこの種の問題に關しては何も嚴密なる限界を定め置く必要もないのである。

四、或る地方區の人口數が聯邦を壓倒するが如き程度に大なるものであつてはならない。併し人口數に於ける相當の差異なるものは避け難い。

五、地上行政上重大なる役割を演ずる水道、

疏水、道路、電車、瓦斯、電氣これ等のものの總ての「線」は河谷に沿つて施設されるのが最も容易であり且自然であるから、従つて一の河谷の全體が一の地方區中に含まれるといふことは概して望まじきことである。此處に於いて境界線なるものは分水界に接近して引かるべきものであるといふこととなる。併しながら分水界を正確に決定するといふことは多くの場合甚だ容易なことではなく、且、それは多くは迂餘曲折した線である。また谷の最小端部はこの見地に於いては殆ん問題ではない。従つて分水界は境界の大體の方向を決定するものであつて詳細の點まで規定するものではない。併し、殊に小さな河谷の場合、河谷の中央に沿つて境界線を引くが如きことは正當とは考へ得ない。

六、英蘭には古くから州カウンティなるものが存するが、此處に述べるが如き區分に於いては或る程度までこれを無視しなくてはならない。それ故此處に考へなくてはならないのは州に就ての

民衆の愛郷心ともいふべきものの問題である。かかる感情の強度を計測することは困難であるが、併し自然地域ナチュラレンジョンに近接した如き州、例へばヨークシャーの如きは、これとは反對の州、例へば Hertfordshire の如きに於けるよりもこの種の感情が一層強烈であることが窺ひ知られる。従つて自然地域を尊重するこの種地方區々分にあつては州に就いての民衆の愛郷心といふが如きものは地方區に就いての廣い愛郷心の中に織り込まれ終るであらう。何れにしても地方的感情なるものの問題は重大なる問題であつて、それが境界線の正確な位置を決定する場合が尠くない。

地方區を設定するに當つては吾々はまづ參照するに人口圖を以つてしなればならない。英蘭の人口圖を一見して直ちに吾々の眼に映ずる五つの人口稠密なる都市地域がある。即ち

(1) Greater London (2) Durham-Northumberland 炭田の中心地方 (3) West Yorkshire (4)

South Lancashire (5) "The Black Country" 之れである。南西に向つては Bristol の炭田があり、ブリストル市は人口は少いけれども久しい傳統からして西部英蘭 "West of England" の首都たるの資格を備へてゐる。更に南西に進んではデボンの半島があり、此處にあつては二州で百萬を越える人口を有しその四分一が Plymouth Sound の周圍に集つてゐる。南方には Hampshire の盆地があり、これは地理學者にとつては明確な自然的地域であり、歴史家文藝家にとつては古き Wessex の中心地であり、また Thomas Hardy の所謂 Wessex であり、またその地の住民によつては多く "South of England" と呼ばれる地方である。これ等を除いた英蘭の殘部、それは倫敦によつて直接支配されてゐる "Metropolitan England" とでも言へべき部分であり、この部分の全人口は千二百萬を超え、その人口數に於いて他の地方區は到底比較にならない。この部分に於いては Greater

London の外は主として農業地域であり、民衆生活上また行政上、倫敦とは相違してゐるのであるからして、此處に試験的に Greater London それ自體を一の地方區とし、その他の部分を更に南部、西北西部、東北部の三地方區に分つこととした。而してこれ等三地方區の倫敦に對する關係は英蘭の他地方區相互の關係とは大いに相違してゐる。

かくて英蘭を左の十二地方區に分ち得るであらう。

- (1) North England
- (2) Yorkshire
- (3) Lancashire
- (4) Severn
- (5) Trent
- (6) Bristol Province
- (7) Cornwall & Devon
- (8) Wessex
- (9) South-east England
- (10) East England
- (11) Central England

(12) London

この論文を通じて地方的首都 (regional capital) の役割を重要なものとして考へ來つたが、地方區の一般生活に對する一の焦點なくしては鞏固な愛郷心の發展に對する見込は薄弱である。

一 地方區にあつてその何れの部分よりも遠く隔たらない一の首都を有することにより一地方區渾和の精神は大いに増大される。茲に提案された英蘭の區分に於いては此の要求が、倫敦の周圍の地方區を除いては、大體に於いて満足されてゐる。例外たる Metropolitan England にあつてはその地方區は各々倫敦の支配下であり、それ等の首都たるものもまた倫敦に從屬してゐる。ウエセックスともなればそれは倫敦からは餘程離れて居り、更に明瞭なる一自然地域をなすが、尙ほ多くの影響を倫敦から受けてゐる。

英蘭に於ける一〇の綜合大學、四の單科大學

フォーセット、英蘭の自然的區分

の分布もこの問題と關聯せしめて興味深いものがある。即ち上に記した一二の地方區のうち一〇にはその首都たる市に綜合大學乃至は單科大學があるのがある。

本論文の最初に述べた原則によつて英蘭を幾つかの地方區に區分するの試みに於いて得た地方區は偶然の結果として多くは州の幾つかの集合より成立するといふこととなつた。各州間の境界は多くは不満足なるものであるが、殊に今日の情態からして不適當と思はれるもの、例へば Notts, Derbyshire 間の Erewash 河谷に沿ふ境界、Lancashire, Cheshire 間の Mersey 河谷に沿ふ境界の如きは、二州が一の地方區中に入るることによつて解消する。州境界を變更せしめると言ふも、それは多くは河谷の線より分水界の線への移動であつて、例へば Wexham 谷より Northampton 高地へ、或ひは Dove 河谷よりその西方分水界への移動の如きである。

Wiltshire は英蘭に於ける最古の "shire" の

一で、河谷が未だ森林と沼澤とを以て塞がれ、住地は、主として高地上にあつた頃から既に“shire”であつた。首都は久しく白堊の高地上なる Old Sarum であつた。その後森林は開かれ續いて住地は河谷に移つた。即ちウィルトシャーは人類分布の大變化の一縮圖を供するのである。嘗ては人口稠密であつた上部地域は今や人煙稀れる地域となり、以前殆んど見捨てられ顧みられなかつた河谷が今や人口最も稠密なる部分となつてゐるのである。森林、沼澤を以てして一の障壁をなした河谷も今や交通通信最も容易な通路となつたのである。斯かる變化を見る時、時勢に應じて地方境界を變化せしめることの如何に正當且必要であるかを知るであらう。

本論を終るに臨んで尙一の境界に就いて述べなければならぬ。それは、從來屢々提案され恐らく一般に承認せられたことと思ふが、英蘭の地方行政區再分に當つて Monmouthshire の

大部分はウェールズの一部となることである。同時にウェールズの東北部の境界を幾分變更する必要があるといふことである。Flint なるウェールズの一州は Dee 河を超えて Cheshire 平野に續いてゐるが、言語の上から或ひはその地民衆の感情の上からすればこれは差支ないことであるが、地理學的考察或ひは行政上の便宜の點からすればこれは感心出來ない。その他ウェールズと英蘭との境界の二、三の不規則な點に就いても同様なことが言へる。兎に角ウェールズに議會が置かれることもなれば、この境界線を再檢討する機會も生じ、恐らくウェールズは幾分領土を増すであらうと思はれるが、兎に角兩者の間の境界線は簡單化するであらう。

最後に、本論文は討論の基礎として書かれたものがある。今日見られる地方行政區域は既に今日の要求には適應しないものであるといふことは恐らく一般に承認せられる所であらう。勿論境界の最後の決定は充分談合の結果によるべ

きである。併し一の定つた提案なくしては此の問題の進展も考へられないから、茲に本論文を提出した次第で、これが討論に際しての一の基點とでもなれば幸である。(以上)

以上がフォーセットの議論の抄譯的紹介であるが、この論文が讀まれて後續いて討論が行はれた。その若干を紹介して置くことも全然無意義ではないと思ふ。以下がその大要である。

Dr. Unstead: 地理學の見地のみからこの問題を解決すべきではなく、この問題は一般行政の計畫に關す可きものであるから、その方面での考察は地理學的のそれよりも重大なものと思ふ。従つてこの方面に造詣の深い實際の行政官、或ひは歴史家等の意見を大いに參照すべきだと思ふ。此の論文の標題は、その研究の性質上「自然的行政地域」(natural administrative regions)とでもしては如何かと思ふ。

Dr. Morley Davies: 自分の考へる所ではアン

ステッド博士は幾分フォーセット氏の意見を誤解されてゐるやうに思ふ。またフォーセット氏は各地方區の勢力の平等といふことに意を用ひられ倫敦區の設定の如きには隨分苦心されてゐるやうだが自分をして言はしむれば、かかる杞憂は不必要であると思ふ。

Dr. Mill: 倫敦の勢力を減ずるといことを一の出發點とされてゐるやうだが、併し倫敦の勢力を他の地方區と同一にすることは不可能である。倫敦をブリテンの首都とすれば必然的に倫敦區の勢力は強大となる。ニュー・ヨークに對するワシントンの如く、他の勢力の無い町に首府を移すことも一案であらう。

Mr. Hinks: 大學町は地方の商工業とは殆ど何等關係なく、従つて首都として適したものとは思はれない。

Mr. Fawcett: アンステッド博士が遺憾とせられた點に關して、此の論文は主として地理學の方面から見た場合を論じたもので、勿論政治家の

側からも同様の意見がなされるべきものと思ふ。人間にとつて必要な區分をなすに當つては、人間の實際的分布が最も重要な要素となると思ふ。(以上)

(1) C. B. Fawcett, Natural divisions of

England, The Geographical Journal, XLIX, No. 2, 1917, pp. 124—141.
〔附記〕本稿の執筆に當つては京都帝國大學大学院學生文學士近藤忠君の勞を煩はす所が多かつた。銘記して深く感謝の意を表する。(昭和九年八月一日稿)

經濟空間と經濟地域 (クラウス)

安 藤 鏗 一

Th. Kraus の經濟空間 (Wirtschaftsraum) に

關する論文⁽¹⁾は、經濟地理學の立地論に對する關係、經濟空間の國民經濟學的並びに經濟地理學的解釋及び經濟空間と經濟地域 (Wirtschaftsgebiete) の概念を論じた四つの章から成つてゐる。此處では最後の經濟空間と經濟地域の概念を記した部分を紹介した⁽²⁾。

註 (1) Th. Kraus, Der Wirtschaftsraum: Gedanken

zu seiner geographischen Erforschung. Köln

a. Rh., 1933.

(2) 勿論紹介は順序に従つて行はれるべきものではあるが都合上最後の部分を先きにしたことにした。經濟空間の經濟地理的並びに國民經濟學的解釋を論じた部分もいづれ何等かの形式で纏めてみたい。尙最初の經濟地理學と立地論の關係を取扱つた部分は地理教育に發表の豫定の拙稿に於て不充足ではあるが述べたつもりである。